神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Slaughterhouse-Fiveの時空：Kurt Vonnegutと読者の文学的共演

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/490

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Slaughterhouse-Five の時空

Kurt Vonnegut と読者の文学的共演

篠　田　実　紀

半世紀近くにわたりアメリカ合衆国の若者を中心とする広い大衆読者層に支持されてきた作家 Kurt Vonnegut が，2007年４月11日，84年の生涯を終えた。10代前半から両切りの Pall Mall を吸い続けたヘビースモーカーの彼は，これだけ長期間喫煙しても84才の今もまだ死なないということで同社を告訴しているというジョークを交えた，故郷 Indianapolis で行う予定の講演原稿を書き終えた後，Manhattan の自宅の階段で転倒，頭部を打撲した事が原因の死亡だった（Vonnegut, *Armageddon in Retrospect,* 16)。そのまま彼の小説に使えそうな，読者を思わず失笑させてしまう予想もつかぬ最期であった。Vonnegut の作品の最大の魅力は，この上もなく辛く厳しい現実を描写する時，感情を交えず淡々と流れる文章の中に意外な形で意外な方向から意外なタイミングで飛び込むきわめて簡潔なジョークにある。彼は最期まで自身のユーモアの美学を貫いたと言ってもいいかもしれない。彼の最後の講演原稿は，死後息子の Mark によって代読され，その後に出版された未発表作品集 *Armageddon in Retrospect* 中に収録されている。その本の序文で Mark は，つまらないたわごと（“crap”）ばかり並べていると感じられた父の原稿を朗読した時の聴衆の反応を見て，父がいかに彼らに愛される存在であったかがわかった（“I realized that I was reading his words to an auditorium and a world utterly in love with my father who would have followed him anywhere.”）と振り返っている(9)。

Vonnegut の文学は，その受容者である読者や聴衆を抜きに語ることはできないと言っても過言ではない。彼の文体には文学的な趣向を凝らした技巧はほとんど見られず，だれにでもわかる単純で簡潔な表現が特徴的に並ぶ。特別に優れた文学者というイメージがないにもかかわらず，彼の作品は多くの読者を引きつけ，講演には多くの聴衆が集まった。彼が1991年に行った湾岸戦争に反対する講演に参加した Todd Davis は，聴衆はさながら“rock concert or political convention”のような熱狂で演説を聞いていたということである (3)。Vonnegut は特に若い学生達には人気があり，大学の卒業式のスピーチを依頼されることも多かった。本論文では，彼の出世作かつ最高傑作の *Slaughterhouse-Five* (1969) を中心テキストとし，エッセイやインタビューにも触れながら，大衆層という強い味方に支持され続けてきた Vonnegut 文学の魅力と彼が与えた社会的インパクトを探っていきたい。

1）Vonnegut 文学の人気の背景

文学作品を作者の伝記的要素と関連づけると作品そのものの魅力を破壊する危険を伴うことがあるが，Kurt Vonnegut 文学については例外としていいだろう。彼は，作品・講演・インタビューの中で伝記的要素を進んで露出してきた。*Slaughterhouse-Five* では作者としての自己を最初に登場させるノンフィクションパートを冒頭や最終章に配置するだけでなく，小説中にも幾度か作者がちらりと登場する場面がいくつかある。これ以前にも Vonnegut は，*Mother Night* の“Introduction”で自身について語っているが，小説から独立した“Introduction”や“Preface”ではなく小説の中に作者が彼自身として登場する試みは *Slaughterhouse-Five* が最初である (Allen, *Understanding Kurt Vonnegut,* 82)。Billy Pilgrim という主人公が存在するフィクション作品の中にわざわざ作者が割り込んでくるという特異な形式は，この作品を語る際に注目すべき点である。その後 Vonnegutは，

フィクション以外に，自身について多くを語るエッセイや講演記録を盛り込んだ作品を４編出版しており，うち２編には “autobiographical collage” という副題をつけている。このことからわかるように，Vonnegut 文学は Vonnegut 自身とその経歴と不可分に結びついており，作品と作者を同時に論じることはきわめて重要である。

Vonnegut の経歴をたどると，彼が通常の文学コースを経て作家になったのではないという事実がわかる。Vonnegut は，1922年11月11日に中西部 Indianapolis のドイツ系移民３世の建築家 Kurt Vonnegut（Sr.）の３人の子の末子として生まれた。彼の家族は裕福だったが，大恐慌で富を失い，Kurtはそれまで通っていた私立学校から公立学校に転校させられる。高校では学生新聞の取材や編集を行い，Indianapolis でジャーナリストを志すが，物書きでは経済的に自立できないと考えた父により，兄 Bernard と同じ科学の道に進むように指示され，New York の Cornell University で生化学を学ぶ。しかし，科学を好きになれなかったKurtは，陸軍に志願し入隊，ドイツ戦線に送られる。ほどなく1944年ドイツ軍最後の猛攻 Battle of the Bulge でドイツの捕虜となって Dresden の収容所に送られ，そこでイギリスとアメリカの連合軍による大空爆を体験する。復員後は結婚し，結婚相手のJane とともに Chicago に移り，University of Chicago の大学院で文化人類学を専攻するが，学位を得ることなく1947年に大学を去る。その後は妻と息子の Mark を支えるため，兄が勤務する New York の General Electric（以下 GE）社の研究所で科学研究に関する記事を書く仕事をしばらく続けるが，1951年には職業作家になるべく GE を退職，Massachusetts の Cape Cod に移りいくつか小説を書くものの，なかなか認められない。

Vonnegut には Mark を含め３人の子供が生まれるが，1958年には姉の Alice とその夫が24時間以内に相次いで亡くなったため，３人の甥も引き取り，貧乏作家として妻 Jane と６人の子供を扶養することになる。このころからVonnegut は，Dresden 空爆を題材にした小説を書きたいと思うよう

になる。1965年から２年間は中西部に戻り，University of Iowa で作家のワークショップに参加し，学生達にフィクションの書き方を教えた。1967年には Guggenheim Fellowship を受けて Dresden でのリサーチを行い，1969年に *Slaughterhouse-Five* を出版，この本がベストセラーとなり，Vonnegut は一躍有名になる。

以上みたように，Vonnegut は，職業作家として文学の訓練を特別に受けた事はない。しかし，その彼が著した *Slaughterhouse-Five* がベストセラーとなり，その後も彼の作品が多くの読者を獲得した要因は，まさにその特異な経歴の中にある。Jerome Klinkowitz は，テーマも形式もポストモダンでありながら，読者が批評家や理論家などインテリ層に限定されるポストモダン作家 Thomas PynchonやJohn Barthらとは異なり，インテリではない一般大衆をも読者に取り込むVonnegutの魅力を，その作品に流れる人間性 (“more enduring qualities of simple human decency, understanding, and compassion”) にあるとした上で，彼の経歴中作家としてはユニークな “biochemistry, anthropology, and journalism” の３領域を人気の要因として挙げる (*The Vonnegut Effect*, ix-x)。Vonnegutは，Shortlidge High School と Cornell University で学生新聞の仕事を通してジャーナリズムに関与，同大学で生化学を，University of Chicago では人類学を専攻，GE社では科学者の研究を記事にした。Klinkowitz の指摘どおり，科学から学んだ自然のメカニズムに対する冷静な観察眼で認識した現象と，科学の絶対性の裏面である人類学から学んだ “cultural relativism” に裏打ちされる人類愛が，学生好みのユーモアを交えたジャーナリズムの客観性を以て表現されるとき，きわめて重大な出来事が，エリートの独白にも単純なセンチメンタリズムにも陥ることなく，文学的知識や感性を持たない大衆にも伝わることになる (*The Vonnegut Effect,* x)。Klinkowitz が挙げた３つの要素が自己の創作活動に与えた恩恵は，Vonnegut 自身も認めるところである。

自らの意志に反して大学で科学を学び，GE 社で科学者と関わってきた

Vonnegut は，自分には科学の才能はなかったが，GE 社での兄やその友人の科学者などとの交わりは楽しかったし，そこで見聞したことは後に彼の文学で展開するSF的要素を生み出す重要な原動力となったので，結果的に父と兄に無理矢理科学の世界に放り込まれたことはよかったと言う（Allen, *Conversations with Kurt Vonnegut,* 93, 183)。Vonnegut 文学の科学的要素は，宇宙人や珍奇な発明物などのSF的な内容面のみならず，その冷静で客観的に現象を観察する文体にも表れる。特に *Slaughterhouse-Five* の Dresden 空爆前後の場面のような悲惨な現実を描写する際に用いられる，主観や情緒を介入させない客観に徹した表現に最大限の効果を発揮する。読者は，文学というよりは科学の観察を思わせるその無機的な文体によって，既成概念に邪魔されることなく現実をそのまま直視し，それを自分なりに解釈することになる。一方で，子供のように純真な科学者達が研究に打ち込む姿を見てきたVonnegutには，彼らの発明がその意図の及ばぬところで戦争に利用され，DresdenやHiroshimaで多くの命を奪う結果をもたらした悲劇を深く嘆く（*Wampeters, Foma and Granfalloons,* 163. 以下WFG)。また，彼はNASAの宇宙開発について，宇宙開発もいいけどその金でもっといい病院やいい学校を作ればいいのに，と言うNew Yorkのタクシー運転手の素朴な見解に心から同意する（Allen, *Conversations,* 100)。科学者として自己の知的好奇心の追求に徹するためには，彼は人間的すぎた。

戦後入学した University of Chicago で Vonnegut は，文学と科学を和解させる学問に出会う。指導教授に相談に行ったところ，「科学のふりをした詩」(“poetry which *pretends* to be scientific”) である文化人類学を学ぶことを勧められる（WFG, 178)。この領域での彼の最大の収穫は，地球上には異なる様々な文化が存在し，この社会には多くの選択肢が存在するという文化の相対性（“cultural relativity”）を学んだことで，その影響で，作品中では単一の絶対的な価値判断を示さず多様な選択肢を呈示しているが，それが若い世代の読者に人気がある一因ではないかと自己分析している

(Allen, *Conversations,* 104)。*Slaughterhouse-Five* の自伝的な第１章で，“you never wrote a story with a villain in it.” と言う父に対して Vonnegut は，それは戦後大学で学んだことだと答える。 人類学で “there was absolutely no difference between anybody.” と “nobody was ridiculous or bad or disgusting.” という２点を教わったのだという (8)。実際に彼の作品には villain だけでなく hero も登場せず，登場人物の価値観を作者が絶対評価することはない。 *Slaughterhouse-Five* の中の Tralfamadorians という宇宙人も，通常の SF 小説の宇宙人のように地球に害を及ぼす “invaders” ではなく，単に地球人とは異なる時間感覚を持ち，地球人に興味を持つ存在でしかない (Klinkowitz, *Kurt Vonnegut's America,* 59)。彼らは自分たちと地球人の時間感覚の相違点を示して Billy Pilgrim の思想に影響を与えるものの，彼に双方の感覚の優劣をせまることも二者択一を迫ることもない。

学生時代のジャーナリズムへの関与が Vonnegut の文学とその人気に与えた影響も大きい。*Slaughterhouse-Five* の出版後も彼の作品や講演が，時代遅れとならずにその後の長い生涯にわたって人気を保ち続けた理由のひとつとして，彼が常に時代を敏感に感じ取り，時代に相応した重要な社会問題について語るジャーナリスト感覚を身につけていたことが挙げられる。多くのフィクション作家が作品中で自己の主張を表象することに主眼を置き，その結果，読者が作家の特殊な世界を共有する一部の層に限定されるのに対して，新聞や雑誌の記者は一般的に，幅広い読者に読まれることを必ず意識し，可能な限り主観や感傷にとらわれず，単純で淡白な表現を用いる。Vonnegut の文体は後者に近く，彼の平易で淡々とした語り口は，受容者として広範囲の読者や聴衆の存在を強く意識した結果の産物である。インタビューの中で彼は，動画を見る事と異なり文章を読むという事は難しい作業であると指摘し，だからこそ自分が書く時には読者が理解できないような表現は避け，セミコロンやダッシュを使わず短い文を並べ，スペースを多くとって読みやすく

することによって，“simplicity” を心がけるのだと述べている。何故大学生に人気があるのかという質問に対しては，“Why are we on earth, what's really going on” など，だれもが疑問に思うが年をとると質問しなくなるような “a very simple-minded, sophomoric sort of thing” を話すからだろうと答える（Allen, *Conversations,* 47-48)。重要な社会問題を客観的で単純な文体で書くと，読み手にわかりやすい反面，無味乾燥で単調になって読者を退屈させたり，現実の深刻性に耐えきれない読者が最後まで読まずに途中で放棄したりという危険性を伴うが，Vonnegut の作品が読者の興味を最後まで惹き付ける秘訣は，適所に短く配置されるジョークやユーモアの存在である。絶妙の間合いで飛び込んでテンションを和らげる効果的なジョークは，深刻な場面の現実を変形させず読者に現実を直視させたまま様々な問題意識を喚起することを可能にする。ナイーヴで気まぐれで飽きやすい学生を対象とした新聞に関わった経験がここに生かされている。

Vonnegut の人気の背後には，以上３点の他にも，彼自身の性格や家庭環境，そして彼の生きた時代など，様々な要素がある。Vonnegut は，芸術家として恵まれた環境に生まれ育ちながら，大恐慌や戦争という困難な時代であったために，好きでもない科学を勉強させられ，第２次世界大戦でドイツの捕虜になり，*Slaughterhouse-Five* が出るまでは経済的困難に陥るなど，多くの苦境にみまわれた。しかし彼は運命を恨むことなく，それらの困難を乗り越える。その過程で彼を何よりも支えたのは，物を書くという行為そのものであった。彼自身インタビューの中で “Writers get a nice break in one way, at least: They can treat their mental illnesses every day.” と認めるように，文章を書く行為そのものが彼の癒しとなっていた（Allen, *Conversations,* 109)。

最後の作品となった *A Man Without a Country* に “I am from a family of artists. Here I am, making a living in the arts. It has not been a rebellion.” とあるように，Vonnegut の父と祖父は建築家で，彼は

芸術家の家系に生まれた（14)。彼の母は実業家の令嬢で文学をたしなみ，自身も短編小説を書いていた。家には多くの文学書があり，Vonnegut は Herman Melville や Mark Twain をはじめ，文学に親しむことができた。３人きょうだいの末っ子で，家族で最も年下だった彼にとって，他の家族の会話に参加するにはおかしなジョークを使って気を引く方法しかなかった。しかし，家族の気分を害することのないジョークを使うよう，子供ながらに心がけていた（*A Man Without a Country,* 2)。彼の文学が常に読者を意識しているということは前述したが，その原点は，家族の会話に入りたい，家族を楽しませたい，という単純な末っ子の社会的要求にあったのかもしれない。もともと芸術家として恵まれた環境に育った彼は，書くことを愛すると同時に，自分の書いたものをだれかに読んでもらうことを常に望んだ。高校時代に学生新聞に関与したことについて，彼はインタビューで “Fun and easy. I’ve always found it easy to write. Also, I learned to write for peers rather than for teachers.” (Allen, *Conversations,* 179) と言っているように，彼にとって文章を書くことは，権威者である教師や批評家に優等生として認められるための労苦ではなく，仲間に読ませて喜んでもらうための楽しみであった。

しかし，大恐慌が Vonnegut 家に及ぼした影響は大きく，一家が必ずしも笑いあふれる家族の団らんの場であったとはいえない。小学生の Kurt は私立学校から公立学校に転校させられ，不況で職を失った父はいつも不機嫌で，母は家計を支えようと短編小説を雑誌に出そうとしたが採用されず，抑うつ状態になり，遂には Vonnegut が陸軍に入隊してまもなく，1944年の母の日に睡眠薬自殺を図る。実際，Vonnegut の両親の精神状態を反映するように，彼の小説に登場する父親や母親は，子供と良好な関係を築くことができない人物として描かれることが多い（Marvin, 5)。にもかかわらず，彼が自伝的エッセイやインタビューで両親を語る時，そこには彼らへの嫌悪や反感ではなく愛情と同情が感じられる。特に母については，息子が兵士に

なって命を落とすかもしれないという危惧が母の抑うつ状態を悪化させ，自殺の引き金になった可能性にもあると *Palm Sunday* (1981) の中で認めており，軍に志願した事に後ろめたさを感じているようである (83)。Vonnegut は，お嬢さん育ちの母を，料理はできないが聡明で文才ある女性だったと評価し，彼女が初孫の顔を見ることもなく自殺してしまったことは残念なことであると語る。彼が母の死後 Cape Cod に移ったのも，かの地に住みたがった母の夢を実現するためであった (Allen, *Conversations*, 178)。父について多くを語るようになるのは，*Palm Sunday* の続編 *Fates Worse Than Death* (1991) 以降である。父に捧げたこのエッセイ集の中で，好景気の時は多くの会社から声がかかったが不況のために実際の仕事にはとりかかることができず，そのうち戦争の間に忘れられ，戦後は他の建築家に仕事を持って行かれてしまった父のことを，多くの王子たちが病気になって入院しているうちに魔女によって "Rip Van Winkle" に変えられてしまった "Sleeping Beauty" にたとえている (24)。以上のように，Vonnegut が両親に言及する時は必ず彼らが置かれた状況を説明しており，客観的に見たらほめるべき両親ではなかったかもしれないが，それは不況や戦争など彼らの力だけではどうすることもできない運命に負うところも多いと考えていることがわかる。

また，私立校から公立校に転校させられたことについても，Vonnegut は，それまで知らなかった階層の子供達と知り合うことができたことを喜び，家政婦に家事をさせる自分の母とは異なり，彼らの母親達は自ら料理を作ることができるという事実に驚き，時々自分にもその手料理を食べさせてくれる彼女達はとてもいい人だと感じたと語る (Allen, *Conversations,* 270)。恵まれない運命を余儀なくされた人々を見下したり嫌ったりするのではなく，自分と同等の異なる文化を持った人々として尊重できたKurt少年には，後に人類学で学ぶことになる前述の "cultural relativity" を実感する素地が本質的にあったようである。

２）*Slaughterhouse-Five* と２つの時間軸

Slaughterhouse-Five は，Vonnegut の人生の重大体験のひとつ1945年２月の Dresden 空爆を題材とした小説である。この作品が世に出た1969年，共産主義との戦いをスローガンにアメリカが介入したベトナム戦争の実態がメディアを通して明らかになり，反戦運動が高まりを見せていた。第２次世界大戦の英米連合軍によるナチスドイツの１都市への空爆を題材としたこの小説は，当時テレビの画面を通して見る北ベトナムへのアメリカ軍の空爆の映像と重なり，主として反戦思想を持つ若者たちの心をとらえた。もはや既成の国家権力への信頼を失った彼らにとって，因襲的な小説のルールをことごとく破ったその様式もまた，魅力的であった。宇宙人やタイムトラベルという SF 的要素を盛り込んだフィクションの体裁をとりながら，“All this happened, more or less.” の書き出しで作者の実体験を語るノンフィクションの第１章が存在し，様々な時間が交錯するために結末が始めからわかってしまっている（１）。異なる時間を同一の作品の中に混在させるという奇抜な手法は，この小説中の，すべての時間を一望に見渡す能力を持つ宇宙人 Tralfamadorians の時間認識と合致すると Klinkowitz は指摘する（*The Vonnegut Effect,* 88)。同一の作品中に異なる時間が存在し，はじめから結末がわかっているこの小説は，“no beginning, no middle, no end, no suspense” という Tralfamadorians の小説と同じ特色を持っている（*Slaughterhouse-Five,* 88)。

a）Dresden 体験と “Children’s Crusade”

Slaughterhouse-Five 出版から４年後の1973年の *Playboy* 誌とのインタビューでは，Dresden 空爆について書いた小説がベストセラーになったせいでその体験が自分の人生に持つ重要性が誇張されており，自分は空爆の事をよく覚えていないし，“astonishing” ではあるが自分を変えてしまうほど

の体験ではなかったと語る（Allen, *Conversations*, 94）。しかし，Todd Davis が分析するように，戦争体験の衝撃の甚大さが Vonnegut の記憶をブロックしていたのであり，Dresden 空爆が彼の中で重要性を持たないわけではない（75）。Vonnegut は同じインタビューの少し後で，*Slaughter-house-Five* は，Dresden 空爆について何かを書きたいという強い願望に基づいて書かれた小説で，“It was the end of some sort of carrier… I had done what I was supposed to do and everything was OK. And that was the end of it.” であり，この後は何も書く気にならないと言っている（107）。しかし，彼は *Slaughterhouse-Five* 出版後40年近くも作家生活を続け，精力的に講演をこなし，インタビューを受け，Dresden の体験は多くの作品や発言の中で繰り返し直接的間接的に触れられている。そのうちの１つのインタビューで彼は，空爆後の Dresden の廃墟に立った時のことを “It was a moment of truth, too, because American civilians and ground troops didn't know American bombers were engaged in saturation bombing.”（Allen, *Conversations*, 174）と振り返るが，戦争の実態を知らない人々に真実を伝えることの重要性を感じる原点がここにあるといえよう。そう考えると，Dresden 空爆は彼の人生できわめて重要な体験であり，その “moment of truth” を最初に語った *Slaughterhouse-Five* は，“end” であると同時に新たな出発点でもある。

戦後 Vonnegut は，戦争の話を書こうと思い，Indiana で Dresden 空爆について調べたが，Dresden 上空を飛んだ飛行機のうち２機が撃墜されたという事実しかわからなかった。アメリカではこの空爆についてほとんどが秘密にされていたが，ヨーロッパの人に会って，自分は Dresden にいたと言うといつも相手は驚いてもっと知りたがった。Vonnegut はその後，イギリス人 David Irving の本で Dresden 空爆が，ヨーロッパ史上最大の虐殺であり，多くの死者を出したものの戦略的には大した必要性がなかったことを知る（Allen, *Conversations*, 175）。しかし，実際に小説が完成したのは

それから23年後のことだった。

Slaughterhouse-Five の第１章で，作者が University of Chicago の教授に自分が書こうとしている本について話すと，その教授はナチスドイツがユダヤ人に行ったホロコーストのことを言ったという経験が出てくる。教授の意図は，ドイツの悪行は空爆という復讐に値すると反論したいのである。第２次世界大戦後時を経ず，ドイツの残虐行為の情報のみが一方的に流れ，ドイツが加害者でユダヤ人は被害者，アメリカは悪者ドイツを倒した正義の味方という単純な解釈が優勢だった時代，ここで作者は “I know, I know. I *know*.” と答えることしかできない (10)。John Wayne や Frank Sinatra 等タフなハリウッドスターが主演するような物語を書こうとしても，なかなか筆が進まない。壁にぶつかった Vonnegut は戦友の Bernard O'Hare に会いに行き，ここで彼の妻 Mary の “You were just babies then. It's not fair to pretend that your were men like Wayne and Sinatra and it's not fair to future generations because you're going to make war look good.” という指摘が彼の目を醒させることになる (Allen, *Conversations*, 175)。後年 *A Man without a Country* でもこのエピソードが出てくるが，そこでは更にこの後 Mary が “Why don't you tell the truth for a change?” と提案したと書かれている (19)。

創作に行き詰まった Vonnegut が1964年頃 Bernard O'Hare 夫妻に会いに行き，Mary の指摘を受けて小説の副題を “Children's Crusade” とすることにしたというエピソードは，*Slaughterhouse-Five* の第１章でも語られる (15)。この時の Mary は，ベトナム戦争の時代から第２次世界大戦の時代を見ている。Vonnegut の訪問に最初は “polite but chilly” (12) という程度の態度を示していた Mary は，夫 Bernard と Vonnegut の戦争の話を聞くうちに次第に不快感を募らせる。遂に彼女は “anger” を Vonnegut に向けて “You were just babies in the war－like the ones upstairs!” と叫び，“And war will look just wonderful, so we'll have a lot more

of them. And they'll be fought by babies like the babies upstairs." と批判する (14)。1960年代後半の現在，未熟な青少年が兵士に憧れ次々に戦場に赴いて命を奪い，命を落とし，生きながらえても心身ともに傷つく原因の一つは，タフな大人のヒーローが悪を懲らしめて勝利する魅力的なものとして戦争を描く映画や小説などのフィクションに騙されるからだというのだ。この時 Vonnegut が同伴した娘とその友達は O'Hare の子供達とともに２階で遊んでいるが，Mary が "like the ones upstairs!"，"like the babies upstairs" と繰り返し自分の子供達に言及するのは，彼女が母親として自分の子供の将来にまで目を向けていることがわかる。彼女は20年前の戦場での自分たちの体験をもとに同種の虚構を創り上げようとする Vonnegut の小説が，現在の若者のみならず現在の babies をも20年後に同じように戦場に送り出すことになりはしないかと危惧するのである。

Mary と交わした "there won't be a part for Frank Sinatra or John Wayne." (15) という約束どおり，第２章以降登場する主人公の Billy Pilgrim をはじめとする前線の兵士達は思慮分別ある大人のヒーローではなく，ほとんどがナイーヴな子供達である。その一例が Roland Weary で，この小説中唯一のハリウッド的ヒーロー譚が，彼の想像上で語られる "true war story" である。Billy と２人の斥候と共に生き残った対戦車銃撃兵 Weary は，戦後家族に聞かせるべく頭の中で自分をヒーローとする武勇伝を作り上げる。彼は，自分と２人の斥候を "Three Musketeers" に見立て，自分で何もできない弱者の Billy を救出するという話を想定する (42)。しかし，現実の彼が Billy を殴りつけて危険を逃れさせようとする行為は，救命という結果にはなっても，Billy にとっては有り難くない暴力行為である。そして遂には想像に没頭するあまりヘルメットを木の枝にぶつけ，その音に気づいたドイツ兵に捕まることになる。想像の中の強いヒーロー像とは似ても似つかぬ baby 像が，コミカルに語られる。

b) ベトナム戦争

フィクションの舞台裏ともいえる第１章の存在により，この小説が単に1945年の第２次世界大戦期のドイツの出来事を伝える事にとどまらず，その時代と1960年代後半のベトナム戦争時代のアメリカ社会を同時進行的に映し出す物語であるということがわかる。しかも，主人公 Billy Pilgrim のタイムトラベルが自分の力で制御できないため，読者も彼とともに異なる時間を予期せぬタイミングで往来させられる。特に主要な二つの時間軸の1945年と1960年代末を何度も行き来するうちに，読者は，20余年を隔てたこの二つの時代の共通性に気づくようになる。

本来 Dresden 空爆の話であるはずの *Slaughterhouse-Five* であるが，第８章の実際の空爆シーンの記述はきわめて淡白である。Vonnegut は Mary O'Hare との約束どおり，爆撃をかいくぐって弱きを救うヒーローが登場する劇的なクライマックスは設置せず，baby だった自分が体験した真実を忠実に描くことに徹した。真実とは即ち，地下の食肉貯蔵庫で聞いた "giant footsteps" のような爆撃音とその衝撃，そして地上に出た後で見た結果だけである (177-178)。皮肉なことに，捕虜たちは，地下にいて空爆の現場を見ることはできなかったおかげで生き存えることができたのである。

解釈や感情を介在させない淡々とした語り口であるがゆえに，そこに書かれた文章の解釈の多くは読者に委ねられることになる。このスタイルもまた，始まりも終わりもない Tralfamadorians の小説のもうひとつの特徴で "no moral, no causes, no effects" に合致する。彼らの小説は電報のような形態をとっており，単純なシンボルしか見えないが，それらのシンボルには "brief, urgent message" の詰まった "depth" があるという (88)。言い換えれば，因果関係のない単純な記述からどのような深い意味を読み取るかは読者次第ということである。実際，1969年の読者には，この短い記述だけで Dresden 空爆を強烈に印象づけ，Vonnegut の反戦のメッセージを伝えることができた。Klinkowitz は，Dresden 空爆を題材としたこの作品がベト

ナム戦争の時代に出版されたことについて，北ベトナムが攻勢を強めた1968年の Tet Offensive 以降の1969年に発表されたからこそこの本がベストセラーになったのであり，“perfect book for the times”と評価する。彼の指摘するとおり，戦況不利になったアメリカ軍による My Lai massacre やナパーム弾での無差別攻撃などの残虐行為（atrocities）が明らかになった時代だったからこそ，アメリカの読者は Dresden の空爆を“atrocity”と認識できるようになっていたのである（Klinkowitz, *Kurt Vonnegut's America,* 62)。空爆が無差別大量殺人だという実態を知る術を持たなかった第２次大戦直後のアメリカの大衆とは異なり，すでに科学技術の発達によりテレビが戦場の映像を一般家庭で見ることを可能にしたこの時代の読者には，空爆の効果と悲惨さがある程度わかっていたからである。

Vonnegut は，後年，何故 Dresden の体験を小説にするのに23年もかかったかという点を語る時，次のように振り返る。

> I think the Vietnam War freed me and other writers, because it made our leadership and our motives seem so scruffy and essentially stupid. We could finally talk about something bad that we did to the worst people imaginable, the Nazis.
> (*A Man,* 20)

Vonnegut は，*Slaughterhouse-Five* 出版後も，アメリカ人に対して Dresden の空爆の残虐性を語る時には慎重である。その理由の一つとして，彼がドイツ系の血を引くアメリカ人だという事実も関係すると思われる。インタビューで語るように，彼は *Slaughterhouse-Five* がヒットした後映画に出て Dresden の残虐性について話してくれと頼まれたが，自分ではなくアイルランド系の友人 Bernard O'Hare に言ってくれと答える。その理由は自分がドイツ系の名前を持っていることで，Dresden はドイツの都市だから徹底的に爆撃されるべきだったと思っている人々と議論したくないというのだ（Allen, *Conversations,* 176)。Dresden 空爆が罪のない一般市民の

大量殺人という結果しか残さず，誰に対しても何の利益ももたらさない不必要かつ無意味な攻撃だったことを熱弁する時，Vonnegut は，この空爆で利益を得た者がたった一人だけいて，それは空爆をネタに本を書いて稼いだ自分だと付け加えることがある（Allen, *Conversations,* 176-177 & Fates, 100)。いかにも彼らしいジョークであるが，このジョークはおそらく，ドイツ系である自己が，当時ナチス統治下のドイツの一都市へのアメリカの残虐行為を批判することに対して向けられる視線を意識して自嘲的に出したように思われる。

1960年代末の読者は，ベトナム戦争には，ナチスが悪でアメリカが善という第２次大戦の単純な図式を当てはめることができないということがわかっている。彼らは，アメリカが常に正義の味方ではなく，如何に正義を旗印に掲げて弱者を救済する目的であっても，結果として共産主義者でもない罪のない人々に甚大な被害を与える加害者になっているという実態を把握していた。1950年代にはホロコーストや London 空襲に対する復讐として Dresden 空爆を正当化していた人々も，ベトナムの実態を知った後ではより中立的な立場で歴史を振り返ることができる。*Slaughterhouse-Five* に出てくる Paul Lazzaro は，一見残酷な復讐鬼に見えるが，“He was proud of never having hurt an innocent bystander.” という記述には，彼なりの復讐の美学が感じられる（139-140)。この１文が，Dresden の空爆は極悪非道のナチスドイツへの “revenge” だという名目のもとに，悪の張本人ではなく，多くの “Innocent bystander[s]” を傷つけたという結果に対するあてこすりであることは明らかだ。

Vonneut の死後，*Armageddon in Retrospect* に収録された未発表のエッセイ “Wailing Shall be in All Streets” は，彼の作とは思えぬ真面目な筆致である。Klinkowitzの言を借りると，“just a stolid recounting of the facts, as if the facts alone should be enough.” という書き方だ（*Kurt Vonnegut's America,* 130)。発表年代が明記されていないものの，おそら

くは戦後の早い時期に書かれてそのままお蔵入りになっていたと思われる。アメリカ大衆文学の最も偉大な作家として多くの読者を魅了してきたVonnegut の死後にこのエッセイが世に出たことはきわめて象徴的である。*Slaughterhouse-Five* 以降，常に読者や聴衆を意識し，自分のメッセージが届きやすいようジョークを交えながら，彼らに考える糸口を与えるよう，自ら語りすぎないように配慮し続けて来た Vonnegut であったが，“Wailing Shall be in All Streets”は，彼の本音ともいえる最も正直なメッセージを直接伝える。彼の多数の作品を愛読してきた読者にとって，ジョークが挟まれなくても，“I would have given my life to save Dresden for the World's generations to come.”という真摯な気持ちが，戦争を生き残ったVonnegutの作家としての使命感を支えたと実感することができるのである(45)。

３）Billy Pilgrim という人物

ここで *Slaughterhouse-Five* の主人公の Billy Pilgrim に目を向けてみよう。彼は John Wayne らハリウッドヒーローからこれ以上かけ離れることができないほどの無力な anti-hero である。Billy は数奇な体験をするが，性格的にはどこにでもいるような一般人で，“guy-next-door familiarity”の持ち主である (Klinkowitz, *The Vonnegut Effect*, 95)。また，彼は，第５章で Dresden 空爆の悲惨さと戦争をする地球人の愚かさを Tralfamadorians に語る場面と，第６章で1976年に自分の死を予期しながら Chicago の民衆に“the true nature of time”(141) について演説をする場面と，第９章でラジオ番組の中で“lessons of Tralfamadore”(199) を語ろうとする場面を除いて，積極的な意志表示をすることはほとんどない。彼は，第２章で自己中心的なヒロイズム幻想を抱いた Roland Weary に殴られても抵抗せず，第５章で，Billyのみすぼらしい身なりを見かねたイギリス人捕

虜が，ナチスからそんな屈辱を受けて黙っていてはいけないなどと言っても無反応である。Billy のように何もしない無気力で弱い人物を中心に据えた効果として，Marvinは，“Vonnegut’s passive protagonist leaves protest up to the reader.” と述べる（117)。Billy の消極性に代わって読者の方が抗議の声をあげたくなる気持ちになるというのである。このような主人公の設定にも，作者が一人で勝手に物語を進めるのではなく，読者を物語に巻き込み，能動的に考えさせようとする Vonnegut の狙いがあるだろう。

主人公 Billy と作者 Vonnegut は，共に1922年に生まれ，第２次大戦中ドイツの捕虜になって屠殺場に収容され，Dresden 空爆を体験するなど，似ている点もあるが，戦後の Billy は，Vonnegut とは大きく異なる。この小説の登場人物中 Vonnegut により近接しているのは，SF 作家の Kilgore Trout であり，Billy と Vonnegut はむしろ対照的な戦後を生きるといってよい。Vonnegut 自身はこの小説を書いた時点では Kilgore Trout のような売れない貧乏作家であったが，Billy は戦後すぐに検眼医学校の創始者の令嬢 Valencia と結婚し，義父 Lionel Merble の仕事をすべて受け継いで物質的には何の不自由もない裕福な検眼医になっている。そして Billy と Vonnegut の最大の相違点として，戦争体験を伝えるか否かという点が挙げられる。今後死ぬまで Dresden 空爆を語り続けることになる Vonnegut とは異なり，Billy は地球人に対して Dresden 空爆の現実を積極的に語ることはほとんどない。彼が新婚の床で妻の Valencia から戦争の話をしてくれと頼まれて話す場面があるが，そのとき話題にするのは空爆のことではなく Edgar Derby の処刑のことである（121-123)。

自分の戦争体験を Billy がどう感じているかということは，彼が唯一例外的に自ら進んで戦争体験を語る第５章の場面に現れるが，彼の主張は地球人にではなく Tralfamadorians に対して向けられる。ここで彼が主張する意見から判断すると，彼が Dresden 空爆の体験からアメリカの軍事政策に疑問を持ち，それを批判的に見ていることはわかる（116)。彼が積極的に意見

を述べる場面は小説中にあと２回ある。第６章での Chicago での演説と第９章での New York のラジオ番組で語るところであるが，いずれの場面でも，彼の話題は戦争のことではなく Tralfamadorians の時間の概念である。1960年代末，既にアメリカの正義の神話が崩れかけていた時期であるにもかかわらず，何故 Billy は地球人に訴えるべきことを宇宙人に主張し，宇宙人の時間感覚を地球人に語ろうとするのか，読者の中に疑問が残る。Billy の中に反戦思想があることを知る読者にとって，第３章の1967年の Lions Club の会合の場面の Billy の無反応に対しても腑に落ちないだろう。彼は，スピーカーのタカ派の海兵隊少佐の北爆推進論を聞いても反論しない。

> Billy was not moved to protest the bombing of North Vietnam, did not shudder about the hideous things he himself had seen bombing do. He was simply having lunch with the Lions Club, of which he was past president now. (60)

更にその後 Billy は，その少佐から，息子が Green Beret になった事を誇りに思うべきだと言われても，否定するどころか “I am. I certainly *am*.” と答える (61)。

Billy が戦争を語らないのは何故か。ひとつには，彼にとって戦争体験は思い出したくない心の傷を残したからである。そのことは，第５章で Billy が戦後すぐに精神的に病んで軍人病院に入院したという事実からわかる。たとえ当時の病院関係者が戦争との因果関係を否定しても，ベトナム戦争が兵士の精神状態に与えた負のインパクトを知る60年代後半の読者には，Billy が戦争体験によって心に傷を負ったということは推測がつく (100)。彼が戦争の話をしないもうひとつの理由は，戦後の彼が置かれた社会的経済的状態にある。Valencia との結婚によって一旦手に入れた物質的に裕福な環境を維持するために Billy は，その環境を与えてくれた義父 Lionel との関係を良好に保つ必要がある。義父が Billy に譲った高級車に貼っているステッカー

(57) や，やがては墜落する運命にある飛行機内で人種差別的な歌を聞いて喜ぶ義父の姿から，Lionel が戦争推進派の保守主義思想の持ち主であることがわかる。Billy は車が自分のものになってもステッカーをはがさず，義父の差別的な態度を批判することもない。検眼医としての物質的な財産や社会的地位を得た戦後の Billy は，それらを与えてくれた義父に対し，その思想に反対意見を述べる事は容易ではない。妻 Valencia が "I'm *proud* you were a soldier." (121) と言うところからもわかるように，過酷なドイツ戦線で戦った Billy はLionel と Valencia 父子にとって名誉ある退役軍人であり，戦争とは Roland Weary が想像したような名誉ある武勇伝として語られなければならなかったのだろう。

Billyが戦争について語らなかったことは，彼の息子 Robert が Green Beret としてベトナムで戦うことの一因となったと考えられる。Robert が父から Dresden 空爆の悲惨さを聞いていたら，Robert は兵士にならなかったかもしれない。[1] Billy と Robert が対面するのは小説中２度だけであるが，この二つの父子対面は印象的である。小説を通して Robert が発する言葉は双方の場面で使用される "Dad—?" のみであるが，単純きわまりないこの呼びかけに対する Billy の反応は全く対照的である。第８章で Robert は，まだ入隊する前の17才の落ちこぼれた不良青年として登場し，父に対して全く同じ "Dad—?" という言葉をかける。これは，barber quartet の歌を聞いて気分が悪くなって結婚記念日のパーティを中座した Billy が２階へ上がるとエレキギターを持ったままの Robert がパジャマのズボンを下ろしてトイレに座っているという場面であるが，ここでは Billy は，"Dad—?" に対して "Hello, son" という言葉を返している (176-177)。もう一つの場面は第

1　Vonnegut 自身の４人の息子達はだれも兵士になっていない。*Slaughterhouse-Five* の第１章でも "I have told my sons that they are not under any circumstances to take part in massacres, and that the news of massacres of enemies is not to fill them with satisfaction or glee." と書いているように、平和主義者の Vonnegut は、大義名分はどうあれ結果として "massacre" となるような行為に息子達が関わったりそれを喜んだりすることがないようにと言ってきたのである (19)。

９章で，飛行機事故で重傷を負って入院中の父を，軍服姿の立派な “leader of men” となって見舞いに来た Robert が “Dad―?” と呼びかけ，これに対し，Billy は何も答えず目を閉じる (189-190)。この上もなくだらしない８章の Robert には “Dad” として “son” と言葉を返す反面，身なり正しい軍の精鋭部隊となった９章の Robert に対しては目を閉じ，あたかも兵士としての息子を否定したいかのような反応をとる。このことからも，息子が自分と同じ軍人になったことを Billy が快く感じていないことは明白である。

Slaughterhouse-Five は，ちょうど Robert と同年代のベビーブーマーの若者たちの心をつかんだ。彼らの中には，中年になった Billy の姿に，自らの父親の姿をだぶらせていた者も少なくなかったのではないか。実際，アメリカの繁栄の陰には多くの Billy Pilgrim が生き残っていた。彼らは，未熟な babies として何も知らずに第２次大戦を戦い，復員したら英雄として扱われ，大学を卒業して結婚し，50年代の好景気の中で職を得て成功し，財を築いた。快適な生活の中で，自分の真実の戦争体験を語りたくても語ることができない。戦時中に受けた心の傷を背負いながらも，あえて人に不快感や反感を与える戦争の話をしないようにする。自分の子供にも語らない。その結果，戦争の実態を知らない子供たちが戦争を美化するフィクションに憧れて戦地へと赴くという悪循環を繰り返してしまう。

反戦のメッセージを発信するに足る体験をしながら，戦後の自分が置かれた環境の保守性に抵抗できない Billy の消極性は，多くの読者を苛立たせる。しかし，Billy というキャラクターは hero ではない反面 villain でもない。読者にとって愛すべき人物とはいえないまでも，憎むべき人物でもない。様々な時間での Billy を知る読者は，彼が，単純な正義を無責任に表明する立場にないことがわかっている。Billy は，すべての時間を一望する能力を持つ Tralfamadorians から，万事は宿命として定められており，“free will” など存在しないという思想を知らされる (86)。このような Tralfamadorians の思想に共感するか否かに関わらず，読者は，自分の意志ではどうにもなら

ない Billy の宿命の重さを考えさせられてしまう。戦後の Billy がただ単に無気力なのではなく，心の中で葛藤しているということは，彼が自分の診療所の壁にかけた“GOD GRANT ME / THE SERENITY TO ACCEPT / THE THINGS I CANNOT CHANGE, / COURAGE / TO CHANGE THE THINGS I CAN, / AND WISDOM ALWAYS / TO TELL THE / DIFFERENCE”という祈りの言葉からも察することができる（60)。この祈りは，1930年代から40年代にアメリカの神学者 Reinhold Neibuhr が作成した Serenity Prayer と呼ばれるもので，アルコール依存症患者の自主治療団体 Alcoholics Anonymous にも採用された（Farrell, 470)。現状を変える必要性と限界の間で葛藤する Billy の心理状態は，アルコール依存症の患者と共通する。このように小説の全体像を見ると，読者は Billy の消極性を歯がゆく感じながらも，彼の責任を彼個人のみに帰するのを戸惑い，彼をある程度寛容な目でみることができるのである。

４）無限の人類愛

Slaughterhouse-Five の最終章にあるように，1969年，ベトナム戦争を終結させる大きな鍵を握っていた民主党の Robert Kennedy 大統領候補が暗殺され，アメリカはベトナムから撤退する機会はその４年後まで引き延ばされてしまう。アメリカ軍の最高司令官となった共和党の Richard Nixon 大統領は1973年にようやくベトナムから撤退，その翌年 Nixon は Watergate Scandal の責任をとって辞任に追い込まれ，副大統領 Gerald Ford が1977年までの任期を引き継ぐことになる。1975年アメリカが支援した南ベトナムの首都 Saigon が陥落し，10年以上にわたり南北ベトナムとアメリカに多大の犠牲者を出したベトナム戦争は，北ベトナムの勝利に終わり，南北は統一されてベトナム社会主義共和国（Socialist Republic of Vietnam）が成立する。1977年からはアメリカは民主党の Jimmy Carter 大統領が人権外交

を展開するが，国内の経済状況は悪化し，再選は果たせなかった。その後12年間，共和党の Ronald Reagan と George H. W. Bush の２大統領が政権を握り，再び保守色を強めることになる。

Slaughterhouse-Five が出て約20年後，Mary O'Hare の危惧が的中してしまう。1990年，イラクがクウェートに侵攻，国連の度重なる撤退勧告を無視したイラクに対し，翌年アメリカを中心とする国連多国籍軍は空爆を開始，湾岸戦争が起こる。Vonnegut は翌年にエッセイ集 *Fates Worse Than Death* を出し，戦争を始めた George H. W. Bush とその前の Ronald Reagan の二人の共和党大統領を大いに批判する。軍に所属したものの実戦に参加せず戦争映画に出ていた Reagan は，映画でしか戦争を知らず，海軍の aviatorだった Bush は爆弾を落とすだけで，自分が殺傷した人間の顔を近くで見たことはないと皮肉る (151)。そして，彼らのように空爆の実態を知らない為政者達に象徴される西洋文明は， イラクやリビアなど特定の国を危険視して国民の不安を煽り，戦争の準備を進める "compulsive war-preparer" であると非難する (135)。2001年の９/11以後は，今度は George H. W. Bush の息子の George W. Bush 大統領によりアフガニスタン空爆が，2003年にはイラク戦争が起こる。2005年，80才を過ぎた Vonnegut の *A Man without a Country* は，更に激しくもはや遠慮も情け容赦もない痛烈な政府批判を展開する。特に痛烈なジョークの例を挙げると，G. W. Bush 大統領と Dick Cheney（本名 Richard Bruce Cheney）副大統領と Colin L. Powell 国務長官の名前を捩った，"The last thing I ever wanted was to be alive when the three most powerful people on the whole planet would be named Bush, Dick and Colon." という箇所である (40)。82才にもなってこんな最低の３人が権力を握る時代に生きるなんてまっぴらだ，という意味だが，国の最高幹部の名前をこれほど卑猥で下品なジョークにする勇気と茶目っ気には感服してしまう。もはや作家として押しも押されもせぬ大御所となった Vonnegut だからこそ実現できるユー

モアである。

Vonnegut の息子 Mark によると，父は，常に “angels” の側に立とうとし，うつ状態になって自殺を図ったこともあり “depressing” なことばかり言ったが，自分の目には父が “depressed” と映ったことはないということだ (*Armageddon*, 6-7)。彼の文学が pessimism や nihilism に陥ることなく，常に読者に訴えかけ，読者に数々の問題を提起し，解決の努力を促すのは，その根底に深い愛情と希望があるからだろう。*Slaughterhouse-Five* では，人でも動物でもあらゆる有機物が死ぬ時 “So it goes.” という表現が続く。これは，すべては運命であり意志の力ではどうにもならないという Tralfamadorians の考えを反映している表現であるが，Marvin は，この単純な表現をしつこく繰り返すことによって読者の “no, it did not have to go that way” という反発を引き出す効果があると指摘する (128)。これまでにも述べたように，Vonnegut は，不幸な人々や好ましからざる人物を描く時，彼らをそのような状況にした責任を彼ら自身に押し付けず，そこに行き着くまでの彼らの運命を提示する。しかし，運命だから仕方がないとニヒリスティックに突き放すことはなく，誰にも責任を問うことがないわけでもない。権力や財力を利用して不幸な状態を人為的に作り出した者が，他者の運命を翻弄した時，Vonnegut は痛烈にその者を責める。その一例が，空からの無差別攻撃を仕掛ける権力者たちである。被害者の苦痛を直接見ることのない彼らにとって，何万もの命が失われようとも “So it goes.” でしかない。

Slaughterhouse-Five の真のクライマックスは，Dresden 空爆という大量殺人よりはむしろ Edgar Derby という個人の死であることは興味深い。Derby は，隣人愛，兄弟愛，家族愛，仲間意識を持ち，ナチスに寝返った Howard Campbell に対しては公然と挑戦して “freedom and justice and opportunities and fair play for all” というアメリカ政府の素晴らしさを主張する高潔で勇気ある人物として描かれている (164)。しかし，この古き

良きアメリカの象徴ともいえる人物が，空爆後の廃墟からティーポットをとったという，この状況下では些細な理由で罰せられ，銃殺されてしまう。

Derby の死は，アメリカの伝統的な良き価値観の死を意味すると考えられる。アメリカ社会の大きな損失は，大家族（“extended family”）が消滅し，“community” が健全に機能しなくなり，人々が孤独に（“lonesome”）なったことであると Vonnegut は指摘する。気の置けない親類縁者がひとつの community の中で生活していると，一組の夫婦や親子が喧嘩をしても，近所の気心の知れた他の親戚の家に駆け込み，ほとぼりが冷めたところで帰宅すればいい（Allen, *Conversations,* 79-80)。しかし第２次大戦後，財を求めて家族から遠く離れる者がふえ，核家族化が進んだ結果，大家族のコミュニケーションの中で培われた人間愛も消滅していった。Edgar Derby は，この人間愛を保持する人物として描かれている。自分の事しか頭にない若い兵士達とは異なり，Derby は，イギリス人捕虜の劇を観て過度に反応してモルヒネを注射された Billy をずっと見守るなど，他者への思いやりにあふれる人物として描かれている。彼の死については作品の冒頭から何度も断片的に言及され，それがクライマックスになることも読者には知らされているため，多くの読者が，Derby の不条理な死に劇的な描写を期待するだろう。しかし，現実のクライマックスは読者の予測を裏切り，非情なまでに単純に淡々と語られる。

> Somewhere in there the poor old high school teacher, Edgar Derby, was caught with a teapot he had taken from the catacombs. He was arrested for plundering. He was tried and shot.
>
> So it goes. (214)

Derby の死は，彼に死という運命を与えた者たちにとっては “So it goes.” で片付けられても，Derby の正義感や人情にあふれる人格を知る読者としては納得がいかない。何故ヒーローになっても違和感のない Derby がこの

ような形で死ななければならなかったのか，読者の疑問と糾弾は，彼にこの運命を与えた主体に向かう。

Vonnegut は，作家の社会的意義を意識しながら創作活動を続けた。彼は，*Playboy* とのインタビューで，作家とは “agents of change” であり，社会を良くするために奉仕するべきだと述べる。彼は，作家をはじめとする芸術家を，坑内のガスをいち早く察知するために炭坑夫が炭坑に連れて行くカナリアにたとえ，芸術家は社会に危険が迫った時に警鐘を鳴らす “alarm system” だと説明する（Allen, *Conversations*, 76-77)。カナリアが鳴いたからといって，すぐに危険が取り除かれるわけではないが，警報を聞いた坑夫は危険に対処する行動をとることができる。Vonnegut というカナリアは，*Slaughterhouse-Five* 以降も，アメリカ社会が危険な方向に行く度に作品を発表して警鐘を鳴らし続けた。そしてそれを真っ先に聞きつけた坑夫は，主に若者達であった。*Slaughterhouse-Five* が，半世紀近くを経た今も読者の心を捉えるように，Vonnegut の死後も作品は残り，その警鐘は異なる場面において響き渡り続ける。彼が長い人生を終えて旅立った後，彼が *A Man without a Country* の中でこき下ろした George W. Bush は，イラクで靴を投げられながら最高権力者の座を去って行った。代わって Vonnegut の人類愛を共有するアフリカ系の血を引く最初の大統領 Barrack Obama の登場により，アメリカは少しずつではあるが，古き良き寛容さを取り戻しつつある。

References

Allen, William Rodney. *Conversations with Kurt Vonnegut*. Jackson: University of Mississippi Press, 1999.

----------. *Understanding Kurt Vonnegut*. Columbia: University of South Carolina Press, 1991.

Davis, Todd F. *Kurt Vonnegut's Crusade: Or, How a Postmodern Harlequin Preached a New Kind of Humanism*. Albany: State University of New York Press, 2006.

Farrell, Susan. *Critical Companion to Kurt Vonnegut: A Literary Reference to His Life and Work*. New York: Facts On File, 2008.

Klinkowitz, Jerome. *The Vonnegut Effect*. Columbia: University of South Carolina Press, 2004.

……. *Kurt Vonnegut's America*. Columbia: University of South Carolina Press, 2009.

Marvin, Thomas F. *Kurt Vonnegut: A Critical Companion*. Westport, CT: Greenwood Press, 2002.

Vonnegut, Kurt. *A Man without a Country*. New York: Seven Stories Press, 2005; Random House, 2007.

……. *Armageddon in Retrospect: And Other New and Unpublished Writings on War and Peace*. New York: Berkley Books, 2008.

……. *Fates Worse Than Death: An Autobiographical Collage*. New York: G. P. Putnam, 1991; New York: Berkley Books, 1992.

……. *Palm Sunday: An Autobiographical Collage*. New York: Delacorte Press / Seymore Lawrence, 1981; New York: Dial Press, 2006.

……. *Slaughterhouse-Five: Or the Children's Crusade: Duty Dance with Death*. New York: Delacorte Press / Seymore Lawrence, 1969; New York: Dell, 1971.

……. *Wampeters, Foma & Granfalloons: Opinions*. New York: Delacorte Press / Seymore Lawrence, 1974; New York: Dial Press, 2006.